

明治後期における「成功」言説と実業エリート

永 谷 健

要旨：日本で企業経営者や起業家が啓蒙家や教育者の一面を持つのは、明治以降の産業化で当時の実業家たちが社会的なプレゼンスを著しく高めたことに始まる。その直接的な契機は、明治30年代半ばの成功ブームであろう。明治期をつうじて、彼らには「奸商」や「御用商人」といった悪評がついてまわったが、成功ブーム以降、彼らは模範的な成功者として扱われ始めた。成功ブーム自体は、日清戦争の戦勝ブーム後に到来した恐慌や時事新報が掲載した資産家一覧がもたらしたセンセーションなどを背景として生じた。その初期においては、書籍や雑誌で海外の富豪の伝記や言行録が積極的に紹介されていた。また、『実業之日本』は成功雑誌へと誌面を改めることで成功ブームの中心的な媒体となり、日本の「成功実業家」の事績を数多く紹介した。さらに、明治38年ごろから、同誌や一部の総合雑誌で、彼ら自身が語る論説やエッセイが大量に掲載され始めた。これには、「高等遊民」の増加が社会問題となった当時の社会状況が深く関係している。メディアの要請に応じて、成功実業家は若者の学歴志向や俸給生活志向を矯正し、彼らを「独立自営」へと導く啓蒙家として振る舞い始めた。そのなかで彼らは、自己の経歴や事績を正当化していった。

1. 序：成功者の伝記的な語り

経営者や起業家の自伝という書籍のジャンルがある。自身の経歴、成功の体験、成功のノウハウ、人生の教訓、処世術などを、彼ら自身が語る。新聞や雑誌の記事のなかで、彼ら自身がそれらを語る場合もある。日本経済新聞の「私の履歴書」のように、新聞の連載がのちに書籍化されることもある。また、これらに類似するジャンルとして、経営者の伝記がある。第三者が彼らの履歴や成功譚を語る通俗的な伝記物の形式をしばしばとるが、書籍ではなく新聞・雑誌の記事として語られる場合もある。経済誌では、著名な経営者の成功のエピソードを成功事例として読者に伝えることが多い。いまだに松下幸之助の伝記が読まれ、また、現代の著名投資家やIT関連の起業家たちによる自伝や伝記が読まれていることは、こうした語りに一定の読者需要があることを示しているであろう。

自伝で経営者や起業家は、おもに企業経営の模範者や革新的な起業家として読者を啓発するが、その内容は必ずしも起業や経営の分野に限定されるわけではない。彼らはしばしば、一般読者を対象とする処世のための指針や教訓について語っている。また、第三者が物語る伝記では、経営者が自己鍛錬に富む人生の模範者として語られる場合もある。彼らはいわば一介の経営者であるが、そこではしばしば啓蒙家や教育家となり、また、人生の成功者として理想化され、偶像化される。読者にとって、彼らは起業や経営のノウハウを提供する先覚者であるとともに、場合によっては成功や人生のロールモデル、あるいはカリスマともなりうる。

日本の近現代という歴史的な文脈を考えた場合、経営者や起業家がこのように他者を感化する位置に立てたのは、やはり明治以降の産業化の恩恵によるであろう。産業化は、彼らの社会的

なプレゼンスを著しく高めた。たしかに近代以降、経済変動や戦時体制の影響で、彼らがそのような“感化する立場”に立てた時期もあるし、立てなかった時期もある。しかし、明治維新以降の産業化によって成功者の存在意義が社会的に承認され、彼らへの理解や支持が生じたことが、彼らをそうした立場へと導いたのは確かであろう。とりわけ、明治期においては、商売や金儲けを蔑むプレモダンな賤商意識が根づよく残っていた。金銭的な成功者が蔑まれる立場にあったにもかかわらず、“感化する立場”を占めることができたのは、産業化やそれによる大國化の趨勢をいわば順風にして、彼らがプレモダンの思潮を跳び越えたことによる。明治の殖産興業策のなかで、農工商、すなわち「実業」分野の振興や拡張が図られ、彼らは「実業家」としていち早くその分野のトップランナーとなった。しかし、次章で述べるように、彼らは事あるごとにその急速な蓄財ぶりを批判された。そうしたなか彼らが“感化する立場”を占めていったのは、どのような経緯によるのであろうか。本稿では、その画期が明治30年代半ばの成功ブームであると見て、ブームのなかで当時の実業家が成功や人生のロールモデルとして語られ、さらに彼らの自伝的な語りが啓蒙的な意味を持ちえた経緯について検討したい。

2. 実業家への批判的思潮

まずは明治期の実業家に対する批判的な思潮について、簡潔に述べておこう⁽¹⁾。当時の新聞・雑誌では、事業で財を成した実業家たちは「奸商」「御用商人」などと批判的に語られることが多かった。たとえば、『日本人』（明治23年9月号）に掲載された中原貞七による「銀行条例発布に就き」という論説では、実業界が、「投機者流の不正商売、或は会社銀行の共有金を濫用し、私利私欲を擅にせんとする者の跋扈する」世界として捉えられる。「今日商業社会に勢力ある者」は、「只他を倒し、己を利せんことに汲々たる狡猾卑劣者流」なのだという。そのため、手堅い商売をしようとする者は、そうした「紳商奸商の為に瞞着せられ、欺かれんこと」を危惧せざるをえない⁽²⁾。銀行業を中心とする民業の成功者たちを、一括して金銭的にダーティな「奸商」として捉える批判的言説の典型であろう。また、「御用商人の運命」（『国民之友』明治22年11月号）は、明治維新後に成功した商人の多くが政府との癒着によって財を成したと主張する。彼らは「藩閥政府の寄り木たる、食客たる御用商人達」であり、「政府を透して人民の租税に衣食せし者」なのだという⁽³⁾。彼らの成功は政府や「人民」の財力への依存の賜物であり、それは単なる僥倖にすぎないというのである。これらの記事は、実業家批判のほんの一部に過ぎない。「奸商」や「御用商人」のレッテルは、金銭の扱いに手慣れ、貨殖のためには手段を選ばないダーティな人物像が実業家の世評として定着していたことを示しているであろう。

メディアによる批判は、実業家本人に実害が及ぶ事態に発展することもあった。いわゆる明治23年恐慌のあとに生じた三井銀行と第一銀行の取り付け騒ぎは、その典型であろう。恐慌の翌年4月に、読売新聞が両行の経営悪化を報じた⁽⁴⁾。これを受けて同年7月に、東京国会新聞が数回にわたって両行への批判記事を掲載した。会計法の導入で政府との契約が一般競争入札となることにより、三井などのこれまで「壟断の利」を占めてきた出入りの「籠商」たちは、競争から脱落することになるという趣旨である。「御用商人」の凋落を報じたこの記事が中外電報と日ノ出京都版に転載された直後から、取り付け騒ぎが生じた⁽⁵⁾。日本銀行総裁の支援もあり、騒ぎは収束したが、メディアの風評が経営のリスクとなることを当時の実業界に知らし

めた事件となった。もう一例挙げよう。明治33年4月から6月にかけて展開された二六新報による三井攻撃も、風評が実業家を脅かした代表的な事件である。同紙は「三井一家の乱行」などのタイトルで、三井家同族とその重役の贅沢で快楽的な私生活や三井関係会社の放漫経営を伝える記事を、連日のように掲載した。記事内容の真偽は明らかではないが、この一件では、三井同族や重役の中上川彦次郎らが同紙の主幹・秋山定輔と面会することでようやく和解し、批判記事は終了した。和解の数日後に三井家は家憲実施奉告祭を行っており、同紙の三井攻撃が三井家の家憲制定の時期を早めたと言われる⁽⁶⁾。これらは、財を築いた成功実業家に対する批判的思潮の根深さとそれを放置することの危険性を物語っている。彼らにとっては、実業という生業のイメージアップを図るとともに、彼ら自身の成功の経歴や実績を正当化することが、事業の継続にとって重要な課題だったのである。

3. 成功ブームの到来

明治35年から36年にかけて、成功ブームが到来した。成功実業家にとって、このブームは批判的思潮を緩和する絶好の機会となった。

雑誌や書籍では、成功に至る人生の素晴らしさや成功を勝ち取るためのノウハウを語る諸言説が盛んに生み出された。『成功』と『実業之日本』はこのブームを牽引した雑誌であり、それらは成功に関わる記事を大量に掲載し、また発行部数を伸ばした。たとえば『成功』（明治35年10月10日創刊）は、村上俊蔵が自宅に設けた雑誌社（成功雑誌社）が発行する小雑誌であり、商店員や学生をおもな読者として想定し、海外や国内の著名人の「立身伝」や「成功譚」を大量に掲載した。明治35年から38年の期間における発行部数は、1万部を超えたという⁽⁷⁾。また、『実業之日本』（明治30年6月10日創刊）は、創刊当初は実業に関する実践的な知識を読者に伝授することを目的とする経済系の雑誌であったが、明治36年から、おもに若年層をターゲットに実業での成功を推奨する啓蒙雑誌へと方向転換した。同年5月に刊行した「成功大観」と題する臨時増刊号は、二ヵ月の間に三版を重ねたという⁽⁸⁾。

これらの雑誌は、成功を勝ち取るためのノウハウや処世観、内外の成功者がたどった経歴や彼らが成功の途上で経験した出来事の数々を紹介した。そして両誌ともに、著名な実業家たちを現役の模範的な成功者として紹介した。とくに『実業之日本』は、彼らのプロフィールを頻繁に紹介した。同誌では、彼ら自身による論説が以前から少しは掲載されていたが、明治30年代後半には若年層向けの啓蒙記事が増えた。彼らは成功ブームに乗って、成功に関する考えを若い読者に発信する機会を得たのである。

明治30年代の半ばに成功ブームが生じた理由については、いまだ明確な説明はない。成功ブームは、実は経済の拡張期ではなく、恐慌のさなかに生じている。日清戦争後の戦勝ブームで諸企業が勃興したあと、恐慌が到来した。企業倒産が相次いで、失業者も増加した。明治34年には金融恐慌となり、いくつかの銀行で取り付け騒ぎが生じた。キンモンスは、こうした不安定期に生じた成功ブームは「不況の代替もしくは代償という意味を含んでいた」と述べている⁽⁹⁾。つまり、好景気で過熱した人々の野心がその後の恐慌の到来とそれによる企業の倒産や失業者の増加によって行き場を失い、のちに野心の受け皿として、成功の確実な方法に対する欲求が高まったというわけである。この時代に成功指南の雑誌記事や成功書が急増した背景には、おそらくキンモンスが指摘するような状況があったに違いない。ただ、実業での成功を目指す「実

業ブーム」に限れば、その生成を促したもう一つの契機について注意を払うべきであろう。

恐慌のさなかの明治34年9月、時事新報は「日本全国五十万円以上の資産家」という資産家一覧を紙面に掲載した⁽¹⁰⁾。これは日本の資産家を網羅的な調査によって特定し、地域別に姓名、住所、職業を記したものである。三井同族、三菱の岩崎、大倉喜八郎、渋沢栄一、安田善次郎といった明治の代表的な経営者も、もちろん一覧に記されている。一覧に付けられた解説記事によると、時事新報社は同年5月下旬以降、府県知事や各地域の信頼できる銀行に資産家の職業や財産総額などの調査を依頼するとともに、同社の通信員たちに詳細を探訪させて資産額を推計したという。記事は、「今日に於て尽せる丈けの手段方法を講じて調製したるもの」と述べ、調査結果に自信を見せている。また、資産額については、「錯雑にして精確を欠く恐れ」があるため掲載を見送っている。渋谷隆一が「科学的資産家名簿の先駆」と述べるとおり、この一覧は入念な調査にもとづいて資産家を特定して公表した最初の資産家リストと言ってもよい⁽¹¹⁾。

資産家一覧の反響は大きく、記事の数日後には、『都新聞』が「日本の富豪家」と題する長文の特集記事を9月27日から三日間にわたって掲載した。記事は、時事新報の一覧を参照しながら、「富豪」たちが富を築いた理由を考察している。記事によれば、彼らの多くは「高利の金」の貸付、株券の「暴騰」、「御用商人」としての「倖運」などによって富を成したのだという⁽¹²⁾。これまでの実業家批判に類似する内容である。また、翌年6月には、この一覧を流用して作成したと思われる小冊子、『日本全国五十万円以上資産家一覧』が刊行されている⁽¹³⁾。そこに掲載された一覧では、資産五十万円以上の者へと掲載対象が拡大されている。また、時事新報にはなかった資産額が記されている。さらに、地域別ではあるが、資産家の姓名が高額資産の順に並べられ、資産家番付の形式になっている。どのような調査にもとづくものか何の解説もないが、記載内容に時事新報の一覧との共通点が多く、これが時事新報社による調査の元データを用いて作成された可能性は大きい。

また、時事新報の資産家一覧は、他の書籍で引用ないし言及されることもあった。同年9月刊の『明治富豪致富時代』という実業家の叢伝では、巻末に時事新報の一覧と解説記事が附録としてそのまま転載されている。また、同年12月刊の『富豪家成功憲法』という成功の指南書では、兩宮敬次郎らが「全国五十万円以上の資産家に、数へられて居る」という記載がある⁽¹⁴⁾。これらのように、時事新報の一覧を参照しながら書かれた書籍や記事は少なくない。

このように、時事新報社の資産家一覧に強く反応したメディアは多い。この一覧は、多くの人々の知るところとなったはずである。日清戦争の戦勝ブーム後に恐慌が生じ、豊かさへの期待が焦燥や幻滅に転じた時期に、同時代の成功者の一覧が登場した。成功の原因や手段が仮にダークなものであっても、一覧に掲示された富豪は、恐慌でも淘汰されることのない“真正”の成功者であった。彼らが依拠したポリシーや彼らの成功のハウツーに対する関心が高まったのは、いわば当然の成り行きであろう。とりわけ、金銭的な成功を望む野心的な若者にとって、同時代の成功実業家は確実に成功に至るためのノウハウの保持者として魅力的だったにちがいない。

4. 成功ブームと『実業之日本』

『実業之日本』などの雑誌や様々な成功読本は、成功ブームの到来で巨大な読者層をつかんだ。では、実業家たちは、成功ブームに便乗しながら実業の魅力や自己の所業の正当性をどのようにアピールしたのだろうか。

諸雑誌や書籍を一瞥すれば、口述や著述の形式で実業家たち自身が語る言説が本格的に流布し始めるのは、明治30年代末ごろからであることがわかる。成功ブームが始まった35年、36年ごろは、むしろ海外の著名な富豪や成功者の経歴、苦心談、成功の秘訣などが、雑誌記事や一部の書籍（いわゆる成功読本のジャンル）でしばしば紹介された。また、海外の富豪の日本版として、明治の著名な実業家の半生が紹介されることもあった。

『立志成功：致富商策』（商業講習会編纂、明治35年）は、そのころの典型的な成功読本である。商家の跡継ぎのために「生活処世の指針」を示そうとするハウツー物だが、「立志成功」という書名のとおり、内容は若年層向けの成功読本である。同書によれば、「古今東西幾多の致富成業家」の伝記を調べてみると、「成功致富」になくてはならない「心術の修養」（すなわち成功を導く徳目）は八項目にまとめることができるという。「専心」「正直」「勤勉」「忍耐」「節儉」「細心」「果断」「度量」である⁽¹⁵⁾。続いて同書は、それぞれの徳目に秀でた先人の例を数名ずつ挙げ、それぞれがいかに先人にとって重要な徳目であったのかを語る。特徴的なのは先人の選定であり、海外の富豪と日本の成功者がいわば無造作に並べられる。「専心」に秀でた者は古河市兵衛、ヘンリー・ハイド（生命保険）、チャールズ・シュワップ（鉄鋼）、「勤勉」は渋沢栄一、アルフレート・クルップ（兵器製造）、「果断」は大倉喜八郎、ネイサン・メイアー・ロスチャイルド（銀行）、「度量」は岩崎弥太郎、コーネリアス・ヴァンダービルト（海運業、鉄道業）といった具合である。そして、それぞれの徳目が彼らの経歴や成功といかに関係が深かったかが語られる。たとえば「専心」を扱う章では、古河がたどった成功への道のりを説明したあと、次のように結論づける。「氏は…（中略）…鋭意専心其経営に苦心を重ね、遂に銅山王の名を博するに至ったのである、之れを以て見るも如何に専心の成功に必要なかを知ることが出来る」⁽¹⁶⁾。そのあと、別の例としてシュワップの略歴がひとしきり語られ、最後に、彼は常日ごろ、成功の秘訣は「一意専心事業に全力を注いで、正直に勤勉するにある」と述べ、それを実行していたとし、そのことが「大会社の主権」を握る彼の地位を築いたのだと説く⁽¹⁷⁾。成功の模範を海外に求めるか国内に求めるかが定まらない時期の成功読本であろう。

また『実業之日本』も、ブームが本格化する前後には海外の富豪の伝記や言行録を積極的に紹介していた。結果的には、このことが同誌を成功ブームの中心的な媒体へと押し上げた。伝記については、トーマス・クック（旅行業）、ウィリアム・ヘスキス・リーヴァー（石鹼製造業）、ジョン・モルガン（金融・鉄道・鉄鋼など）、ジェームス・ワット（発明家）などに関するものが、明治35年7月以降、集中的に掲載されている。さらに同誌は、同年9月から11月にかけて、アメリカの成功者であるA.カーネギーの著書、*The Empire of Business*の部分訳を、「致富の栞」という欄のなかで6回に分けて掲載した。「如何にして富を作る可きか」、「富及其使用法」、「義務としての節儉」といったタイトルが付けられている。そして、それらを生かして同誌の版元・実業之日本社は、同書の抄訳、『実業の帝国』（小池靖一訳）を明治35年11月に刊行した。これが大ヒットした。同書の最終的な部数は不明だが、初版は三日間で売り切れたという⁽¹⁸⁾。同社を主宰していた増田義一は、後年、当時を次のように振り返っている。

「当時小池靖一氏が米国のカーネギー翁の原著『実業の帝国』を翻訳されたのを我社から出版して、本書は成功の秘訣、処世の要道を説いたのだと広告したらば非常に売れたのである。実際予は「成功」の秘訣、是れ世人の要求する所だと悟って、爾来成功に関する記事を掲載することとなった。それ以来俄然として発行部数が激増した。」⁽¹⁹⁾

先に触れたように、このヒットにより、明治36年1月から増田は同誌の編集方針を“成功礼讃路線”へと転換した。巨大な読者需要の在り処（「世人の要求する所」）を発見したのである。『成功』もこれに刺激されたのか、海外の成功者を積極的に取り上げている。同年12月には、「石油王ロックフェラー青年時代」（第1巻第3号）という記事を載せ、さらに翌年1月には、同誌の付録記事として「現世界十傑」（第4号附録）という海外の成功者の略伝集を掲載している。富と名声を獲得した海外の成功者が成功のロールモデルとして引用されるトレンドがあり、それが成功ブームを軌道に乗せたことがわかるであろう。

『実業の帝国』は、17章にわたるカーネギーの *The Empire of Business* のなかから、成功のための基本的なハウツーが語られている章を選んで抄訳したものである。訳者の小池靖一が用いたフレーズやキーワードは、編集方針を転換したあとの『実業之日本』の諸記事にも頻出する。『実業の帝国』は、同誌で展開される実業キャンペーンの“語りの形式”を、ある程度方向づけたと言ってもよいであろう。第一章の「実業成功の途」は、次の一節で始まる。

「実業に志す者は幼年より身を起し、且必ず下級の地位より始むるべし、今日ピッツボルク市の重なる実業家は皆幼年の頃極めて下級の地位より始めた人なり」⁽²⁰⁾。

これは、若き日の満たされぬ境遇や下積みがその後の成功の糧になることを説くものだが、ブーム以降の『実業之日本』の誌面においても、多くの実業家が、学卒者の一足飛びの昇進願望をたしなめる場合に類似のことをしばしば述べる。また、成功の秘訣として挙げられている「正直誠実」（honest, truthful, fair-dealing の訳語）、「投機」（speculation）の禁止、「貯蓄」（save）の推奨なども、明治30年代末以降、日本の実業家たちが自らの経営哲学を語るなかで、しばしば強調される成功の要素である。そのほか、精神的なモットーが語られる際に出てくるいくつかのキーワードも、のちの実業家たちの言説によく登場するものである。たとえば、第一章のなかの「実業家たるの資格を決するもの」という節では、「克己節制」（self-discipline）の習慣によって資本を蓄積することが実業家になる資格であると述べられる⁽²¹⁾。また、第二章「勤儉と人生」では、thrift に「勤儉」という訳語をあて、「勤儉」こそが「文明の野蛮と異なる所以のもの」であるとしてそれを推奨する⁽²²⁾。save という語に「勤儉貯蓄」をあて、過度な「勤儉貯蓄」は「貪婪」となるのであって、それは「勤儉」（thrift）ではないとも述べる⁽²³⁾。小池の訳語は幾分荒くて恣意的なものだが、ここで使用された一群の言葉は、その後の実業家たちの言葉選びを方向づけたであろう。

明治36年1月から『実業之日本』の誌面は刷新された。1月1日号の社説「新年の辞」では、次のように宣言される。

「廿世紀は実業の世界なり。実業的大帝国を建設するものにして、始めて能く覇を称するを得ん。…中略…我『実業之日本』は益々従来の所信を確守し、読者諸君と共に実業勃興の機運を作為するに努むるの目的を以て、紙面の大刷新大拡張を行ひ…」⁽²⁴⁾

宣言に違わず、同誌は「実業勃興」を促進し、実業での成功を礼讃する雑誌として歩み始めた。カーネギーの著書の部分訳が掲載された「致富の葉」という小欄が「成功の葉」欄（その後、「成功」欄）へと拡張され、海外の富豪の経歴・成功譚がこれまで以上に紹介された。「自

転車王ポーブ氏成功談」「大銀行家ゼームス成功秘訣談」「ラッセル、セーチ氏成功談」等々の記事である。先に触れた臨時増刊号「成功大観」(明治36年5月12日)も、海外の成功者の成功譚(「大成功者十五大家成功実話」)を中心に構成された。また、従来からあった「人物評論」欄も拡張された。そこには、日本の成功者たちを紹介する論評記事が多数掲載された。「住友の四天王」「安田善次郎の性格」「少壮実業家(原富太郎)」「実業界に於ける二雄鎮の代表者(益田孝と荘田平五郎)」などである。これらの記事の大半が、今をときめく実業家が有する事業者としての優れた資質を紹介している。たとえば、2月1日号の「安田善次郎の性格」⁽²⁵⁾は、寄附を敬遠する吝嗇漢として語られがちな世間的な安田評では語られない彼の資質をクローズアップしている。そこでは、「謙遜家」の外面を持ちながらも「剛情」であると安田は評されるが、今日彼が成功した「最大原因は自信力」であるとし、「剛情と云ふのも自信力の結果ちや」と述べられる。「剛情」さを「自信力」として評価し、それを彼の成功の資質と見なすのである。また、1月1日号の「高田慎蔵を論ず」⁽²⁶⁾では、若き日の高田が、外国人が経営する商会で働き、のちに高田商会を立ち上げて「巨萬の富」を積むまでになったのは、彼自身の「先天的愛嬌と融和的性情」の賜物であるとする。それは、実業家の月並な「機智敏才」や「権謀術数」のようなものではないというのである。経歴や事績、そして事業の現状の正当化を代行してくれるという意味で、成功実業家にとって同誌は、いわば願ったりかなったりのメディアであった。

カーネギーの『実業の帝国』がヒットしたあと、同誌は明治30年代末あたりまで、海外の富豪の偉人伝をしばしば紹介した。それとともに、日本の成功実業家の経歴や彼らの資質を紹介する記事も増えた。同誌の編集方針は、『実業の帝国』後の成功ブームを軌道に乗せたのだと言えよう。成功実業家にとって、同誌のように実業での成功を推奨し礼讃する雑誌や書籍は、自分たちに纏わりつく悪評をいわば反転させることができる重要なメディアであった。そして、彼らにとって成功ブームは、金銭的な野心を抱く若年層を、メディアを介して同志や支持層として囲い込んでいく絶好の機会であった。

5. 『実業之日本』における実業家の語り

このような数年間をへたのち、実業家たちは自己の事績を正当化する言説を語り始めた。『実業之日本』や一部の総合雑誌に、彼らの口述・著述の類が大量に掲載された。『実業之日本』では、日露戦争のさなかの明治38年ごろから、海外の富豪の成功譚は減少していった。それと入れ替わるように、実業家たち自身が語る記事が急に増え始めた。

明治38年1月から「経験の教訓」欄が新設された。そこでは「実験家の福音」という見出しの下に、現役実業家による自らの成功体験にもとづく実業の秘訣や方法が掲載された。堀越善重郎の「海外成功の秘訣」や「貿易家たるに必要な準備」、園田孝吉の「銀行家に必要な青年の資格」、森村市左衛門の「実業界に入る前後の決心」などである。そこでは、具体的な成功のノウハウよりも、実業の心構えや処世のモットーがおもに語られる。たとえば同年1月号では、高田慎蔵が「年来の私の守り言葉」について語っている。それは「着実」であり、そこには「正直で信用徳義を重ずること」、「勤勉精励であること」、「秩序的 success を期すること」という意味が含まれているのだという。それらによらなければ「一歩づつ上て行く」といった「健全な成功は期せられぬ」。そして、「山師の成功は私の欲せぬ所です」と結んでいる⁽²⁷⁾。若

年層向けのメッセージでありつつも、自己の事業が道徳的に正当なものであり、実業家への月並な悪評（「山師的成功」）は当たらないことを“要領よく”伝えている。

この欄は明治40年から「実験の教訓」と名称を変え、実業で成功するためのコツを若年層に伝授する欄になった。森村の「何事も精神です」、「金銭は如何にして得らるべきか」、「余は如何にして事業の退歩を防ぐか」などの論説が掲載されている。安田の「余は如何にして富を積みたるか」は、彼による初期のハウツーものである。この論説には特別に「勤儉貯蓄」という見出しが付けられており、成功譚がこのキャッチフレーズにもとづいて語られる。ここで安田は、「越中の貧い農家」に生まれ、江戸に出て「玩具屋に奉公し」、様々な商売を経験したあと両替業で成功していった経歴を語り、そのなかで折々に心がけた事柄をいくつか披露している。「虚言を以て他人を害せざる事」、「如何なる事あるも身分不相応の生活を断じて為さざる事」、「凡そ一定の順序を定め、必ず之を實行して止めないといふこと」、「生活費は実力の十分の一を超過すべからず」、「勤儉貯蓄」などである⁽²⁸⁾。そして安田は言う。

「私が今日の富を積みたるは、右様の経歴中から来たので、如何なる處にも至当の順序を履み、世の投機や倖倖に依り奇利を博した俄身上者と自ら趣を異にして居ります。」⁽²⁹⁾

ここには先の高田と同じ語りが見いだせよう。若年層に向かって成功の秘訣を語るなかで、自分たちへの悪評に対してエクスキューズを行う“要領のよいアドバイス”である。

また、やはり明治38年ごろから、以前からあった「青年と実業」欄にも、実業家自身による成功のノウハウに関するエッセイが出始めた。浅野総一郎の「余は如何なる青年を望む乎」、兩宮敬次郎の「無資本にて大商人となるの途」などである。進路選択に迷う若年層に向けて自己の成功譚と成功の指針や秘訣を語り、実業に従事することの価値を伝える記事が、この時期には頻出する。短い期間ではあるが明治38年の後半から設けられた「職業問題」欄に掲載された波多野承五郎の「職業選択の標準」、服部金太郎の「商店に入るに必要な資格」、そして、「成功」欄に掲載された高田の「余が学校卒業者に対する忠告（青年の誤解せる処世法）」もそうである。彼らは同誌の誌面で、あたかも若年層を指導する教育者のように振る舞い始めたと言ってもよいであろう。

6. 独立自営言説と「高等遊民」問題

なぜ若者たちに向かって実業家たち自身が語る記事が、これほど増えたのだろうか。それはもちろん、メディアが彼らに口述や執筆を依頼したからである。『実業之日本』の場合、増田義一が読売新聞経済部の記者であった時代から実業界で人脈を築いており、インタビューを依頼する場合はその人脈が活用されたという⁽³⁰⁾。では、なぜこの時期に、同誌を中心とするメディアは実業家たち自身の語りを求めたのであろうか。これには、若年層にかかわる、ある社会的な背景が深く関係している。若年層の学歴志向と「高等遊民」問題である。当時は中等教育や高等教育への進学希望者が増えた時期である。にもかかわらず、その受け皿である教育機関の入学定員には限りがあり、そのうえ首尾よく入学した者も卒業後の進路が約束されたわけではなかった。苦学生や受験の失敗者、あるいは卒業後に「高等遊民」となる者が増え始めたのである。そのなか実業家たちは、学歴による成功にいわば執着する若者たちを説得して、必

ずしも学歴を必要としない実業の世界へと進路変更させる第三者、すなわちアドバイザーやカウンセラーとしての役割を担う貴重な存在であった。先の「青年と実業」欄の浅野や兩宮の論説などは、学歴によらない成功を若者に指南する記事であり、実業家によるこの時期の語りの典型であろう。

「高等遊民」問題の生起は、彼らの語りの増加と並行している。「高等遊民」の増加といえは明治40年代以降の社会問題であると認識されがちだが、伊藤によれば、当時の代表的な教育雑誌、『教育時論』では、明治38年にはすでに高等教育進学者の就職難という問題が話題になっている。そして明治40年には、日露戦争後の戦後恐慌が生じて、就職難は社会問題として毎年のように新聞・雑誌で取り上げられた⁽³¹⁾。実際のところ、高等教育修了者からは就職未定者が毎年少なからず輩出されている。とくに文科系の修了者に著しい。『日本帝国文部省年報』によると、大会社・大銀行への就職者の一大供給源であった東京高等商業学校の本科を卒業した者のうち、「就職未定ノ者」が占める割合は、明治36年から42年までの7カ年では、17.8%、11.6%、13.4%、34.8%、33.5%、27.8%、36.9%と推移している。明治39年からは卒業生のおよそ三人に一人が進路未定者である。就職状況は悪化していると見てよいであろう⁽³²⁾。東京帝国大学（法科大学）も同様の傾向を示しており、「就職未定又ハ不詳ノ者」は明治末には卒業生の40%近くまで増えている。

そして、ちょうど同じ時期に、『実業之日本』には若年層の学歴偏重や就職戦線における大会社・大銀行志向を批判する記事が掲載され始めた。これは、同誌の明確な編集方針による。刊行十年を記念して編まれた「十周年記念号」（明治40年6月1日）の巻頭記事、「『実業之日本』は十年間に何を為したるか」を見れば、当時の編集方針の大略をつかむことができる。創刊以来、同誌が行ってきたことが25項目にまとめられる。そこには次の一節がある。

「一、『実業之日本』は何が故に率先して独立自営を説きたるか

吾人は学校の卒業生が靡然として銀行に走るを見たり、滔々として会社に赴くを見たり。夫れ門戸限りありて志望者限りなし。是れ一方に於て職業難の起る所以なり。何ぞ眼を転じて茫々たる独立自営の天地を見ずや。且我実業界の青年が相争ふて俸給生活の安易に就かんと欲するは決して喜ぶべき現象にあらず、健全なる実業国民は能く自ら独自の針路を発見し、進んで艱険を冒し、能く困苦に耐へ、堅忍不拔の精神を以て自家の運命を開拓するに在り、徒らに他人の籬下に立ちて他人の嫁衣を縫ふが如きは独立男児の屑とせざる所なり。時代は切りに独立自営を要求す、我実業国民は又大に此方面に向て発展せざるべからず、吾人が率先して独立自営の必要を説き、尚実験者の教訓により物質的並に精神的の両面より其修養方法を示したるは実に之が為のみ。」⁽³³⁾

趣旨は次のようなものであろう。近年の学校卒業者はこぞって銀行・会社への就職を希望するが（「銀行に走る」「会社に赴く」）、それは「就職難」を招いてしまう。また、彼らの俸給生活志向（「俸給生活の安易」）は、「健全なる実業国民」として望ましい態度ではない。こうした状況を鑑みて、同誌は彼らに対して「独立自営」の必要を説いてきた。「独立自営」は時代の要請でもある、云々。

同誌が就職難の原因を、とくに若者たちの野心の縮小や目標の矮小化に求めていることがわかる。若者たちは「自家の運命を開拓する」ことをせずに、大会社の禄を食もうとする。そう

したリスクの回避や他者への依存傾向が、かえって彼ら自身を窮地（「就職難」）に追いやっていると見立てである。また、若者のそのような傾向は、経済拡張という日露戦争後の国策を担う理想的な人材像（「実業国民」）から遠ざかってしまうという含意もある。そうした若年層の悪弊を正すために、同誌は時代の要請でもある「独立自営」という対抗軸を提示したというのである。

同誌が示す「独立自営」とは、自己鍛錬や様々な工夫によって事業に邁進することである。同誌は、学歴を高めて安定した俸給生活へと進もうとする若者たちの生き方に異を唱えて、学歴を必要条件とはしない実業の道に進むことを奨励し、その意義を伝えようとした。先の記事は、そのために「実験者の教訓」を用いたと述べている。「独立自営」による成功者の実体験を誌面に動員したのである。実際のところ同誌では、既述のように実業家の成功譚が誌面のなかで大量に紹介された。そして、実業家が自ら成功譚や成功のノウハウを語る記事も増えていった。実業家たちにしてみれば、「独立自営」やそれに類する処世上のモットーをテーマにして自己の経歴を語る機会を得たわけである。そのなかで、過去および現在における自身の所業をいわば道徳的に正当化することができたのである。

7. 結び：自伝への展開

明治43年から45年にかけては、著名な実業家による自伝的な成功書がいくつかの版元から立て続けに刊行された。実業家の自叙伝ブーム、あるいは実業家の成功書ブームと言ってもよいであろう。著者・口述者は、いずれも『実業之日本』の誌面に頻繁に登場する明治の成功者たちである。日本の実業家が語る“日本版・実業の帝国”が、いくつも出版される時代を迎えた。

洪沢栄一、森村市左衛門、安田善次郎は、それぞれ明治末に複数の成功書を出している。彼らは、言ってみれば日本版カーネギーとしてメディア需要があったのである。実業キャンペーンや「独立自営」キャンペーンを担う編集者や記者が彼らに接触し、著書・口述書の刊行を打診したケースが多かったと推測される。たとえば洪沢の『実業訓』（明治43年刊）は、洪沢の門下生によって組織されていた龍門社のメンバーに対して洪沢が授けていた講話がもとになっており、成功雑誌社を主宰する村上が講話の書籍化を洪沢に依頼することによって実現したものである⁽³⁴⁾。また、森村の『少年実業訓』（明治44年刊）は、博文館の雑誌、『実業少年』の編集長であった石井研堂が同誌のために森村に依頼した連載記事を、森村の了解を取って石井が一冊にまとめたものである⁽³⁵⁾。『実業之日本』などで啓蒙的な語りの実績があり、また自伝的な語りに積極的な実業家が、書籍のジャンルに進出したと考えられる。

若年層の学歴志向と俸給生活志向に向かって対抗軸を提示するというメディアのトレンドからすると、国家的に制度化され権威づけられた教育を受けた経験のない成功者、いわば非学歴系の成功者が、若者への伝道者としてふさわしいということになる。実際、成功書を刊行した実業家たちは近代的な教育制度が整備されるはるか以前に致富した成功者であり、教育や学問が彼らの成功を必ずしも導いたわけではない。その意味で、彼らは「独立自営」言説の格好の語り手であった。彼らは自分の成功経歴を学問によらぬ「独立自営」という観点から語るができるため、学歴志向の若年層を商売や事業へと振り向ける伝道者として、メディア需要があったのである。こうして彼らは、「独立自営」の模範者の位置を占めることになった。実業家の「独立自営」言説は、「高等遊民」が社会問題となる時代に、いわば大量に生み出され

た。時代が求める言説を彼らは盛んに語った。そのなかで彼らは自己の事績を正当化することができたのである。

註

- (1) 総合雑誌における実業家批判については、拙著で詳論したことがある。永谷健『富豪の時代』（新曜社、2007年）第3章、参照。
- (2) 中原貞七「銀行条例発布に就き」『日本人』第54号（明治23年9月）6-7頁。
- (3) 「御用商人の運命」『国民之友』第67号（明治22年11月）45頁。
- (4) 高橋義雄『箒のあと』上（秋豊園、昭和8年）189-190頁。
- (5) 日本経営史研究所編『中上川彦次郎伝記資料』（東洋経済新報社、1969年）344-345頁。
- (6) 三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編『三井八郎右衛門高棟伝』（東京大学出版会、1988年）220頁。
- (7) 『実業之日本』の第2巻第3号（明治36年6月10日）に「数万部を増刷」という記載、第6巻第4号（明治38年4月10日）に「一万五千の読者」という記載、第8巻第1号（明治38年4月1日）にやはり「一万五千の読者」という記載がある。また、三上敦史「雑誌『成功』の書誌的分析：職業情報を中心に」『愛知教育大学研究報告：教育科学編』（61、2012年）参照。
- (8) 実業之日本社社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』（実業之日本社、1997年）29頁。
- (9) E.H.キンモンス（広田照幸他訳）『立身出世の社会史』（玉川大学出版部、1995年）150頁。
- (10) 『時事新報』6412号（明治34年9月22日）。
- (11) 渋谷隆一編『明治期日本全国資産家・地主資料集成I』（柏書房、1984年）5-6頁。
- (12) 『都新聞』第5037号（明治34年9月27日）、第5038号（明治34年9月28日）、第5039号（明治34年9月29日）。
- (13) 山本助治郎編纂兼発行『日本全国五万円以上資産家一覧』（中央書房、明治35年）。
- (14) 墨堤隠士『明治富豪致富時代』（大学館、明治35年）、岩崎勝三郎『富豪家成功憲法』（大学館、明治35年）10頁。
- (15) 商業講習会編纂『立志成功：致富商策』（大倉書店・服部書店、明治35年）52頁。
- (16) 前掲書62-63頁。
- (17) 前掲書69-70頁。
- (18) 実業之日本社社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』（実業之日本社、1997年）27頁。
- (19) 増田義一「予が苦心の告白」『実業之日本』第28巻第13号（大正14年7月）6頁。
- (20) A. カーネギー『実業の帝国』（小池靖一訳、実業之日本社、明治35年）1頁。
- (21) 前掲書16-17頁。
- (22) 前掲書26頁。
- (23) 前掲書30頁。
- (24) 「新年の辞」『実業之日本』第6巻第1号（明治36年1月）1頁。
- (25) 荒東生「安田善次郎の性格」、前掲誌、第6巻第3号（明治36年2月）76-78頁。
- (26) 魁堂生「高田慎蔵を論ず」、前掲誌、第6巻第1号（明治36年1月）80-82頁。
- (27) 高田慎蔵「年来の私の守り言葉」、前掲誌、第8巻第2号（明治38年1月）75頁。
- (28) 安田善次郎「余は如何にして富を積みたるか」、前掲誌、第10巻第1号（明治40年1月）37-40頁。
- (29) 前掲誌前掲号39頁。
- (30) 藤原喜一「増田社長の思ひ出」、梅山糺編纂『増田義一追懐録』（実業之日本社、昭和25年）494頁。
- (31) 伊藤彰浩「日露戦争後における教育過剰問題：「高等遊民」論を中心に」『名古屋大学教育学部紀要』第33巻（1986年）190頁。
- (32) 『日本帝国文部省第三五年報：自明治四十年至明治四十一年』上巻（明治42年5月）247頁。
- (33) 「『実業之日本』は十年間に何を為したるか」『実業之日本』第10巻第12号（明治40年）9-10頁。

- (34) 洪沢栄一述・村上俊蔵編『実業訓』（成功雜誌社、明治43年）1頁。
- (35) 森村市左衛門「緒言」、森村市左衛門著・石井研堂著『少年実業訓』（博文館、明治44年）。